*現代社会の理不尽に振り回されず“毅然とした人物”になるために！＜その１＞*

# 修身の基本修得・大学(古本)編

## 上司から信用、部下から信頼される人物の入門書“大学”を学ぶべし！

◆徳川時代における身分制度(士農工商)において、『武士』を人民(農工商)の最上位に据えましたが、これはただ据えたわけではなく、人民の最上位たる『武士』に人としての高い精神性(道徳性)を求め、『武士』に『武士道』を定着させました。
その『武士たち』で、『大学や論語』を読まない『武士』はいなかったのです。『大学や論語』は、いわば“武士の必読書”でもあったのです。

◆戦後の日本は、人としての付属的要素である『知識や知能』『技術や技能』の教育を一層強化し、習得させることで大きく復興できたと言えます。

◆しかしながら、今日の日本の“大企業のデータ改ざん問題”、行政(官僚)の“障害者雇用の水増し問題”、スポーツ界の“団体不祥事”など、これらの不祥事の根本原因は、技術的な問題ではなく、人としての本質的要素である『道徳性(修身や徳性を磨くこと)』が欠落した組織のトップや、その部下たる管理職者が引き起こしています。

◆このような中で、次の時代を担うべき世代の“声なき声”は、世の中の様々な“理不尽”を感じながらも、それに振り回されることなく“毅然とした判断と対応”ができるようにしたいことにあります。

◆そのためには、『修身』が必要であり、その最初が『論語』の前に『大学』を学ぶことに尽きます。

＜学問の３段階レベル＞

①第１段階は、自分自身の労働力としての“時務学”の勉強
より多くの収入(給料)と引換えるために、人としての付属的要素(知識や技術)の“習得レベル”。

②第２段階は、自分自身の生活を豊かにするための“時務学”の学問
知識や技術の習得を勉強レベルで捉えるのではなく、時務学での学問の根本原理を修得(応用)して、自分自身の日常生活を豊かにしようとする、自分自身のための“時務学の学問レベル”。⇒ 小人型

③もっと上の第３段階は、社会をより豊かにするための“人間学”の学問
この段階になると、天下や国家に基づいて学ぶため、人間学の学問が進むに応じて、学ぶ者の品性も自分自身のためではなく、『治国』『平天下』からの“大人(たいじん)レベル”に自然と向上する。

◆しかしながら、『知識や知能』『技術や技能』を教えることに終始した学校教育において、教えてもらうことが“学ぶ”ことだという思考パターンに若い世代が慣らされてしまいました。

◆その結果、自身で考える本来の“学ぶ”ことをとても苦手にしてしまっています。

◆徳川時代の『武士』の教育においては、７歳～８歳頃より『素読』『講義』『会読(※)』の３つの学習形態で行っており、現代の教育においては、この『会読』が完全に抜けてしまっています。

※数人で同じ書物を読み合い、その内容や意味を論じ合い、自身の言葉で他の人にも説明すること。

◆『大学』の修得においては、この『会読』を行うことで、本来の“学ぶ”ことを思考パターンとして定着させて、『大学』を通して“毅然とした人物”の階段を上ることを目的に開催しています。

## 大学の３綱領(３つの柱)

**１．明徳を明らかにするにあり**

“ 徳 ” とは、本来、人間が生まれながらに持っている(与えられている)善いところのこと。

「世の中に善い影響を与える立派な人物」、つまり“ 大人(たいじん) ” になるための道の第一歩は、「自分自身がこの『徳』を表に現わすこと」。これが一番最初。

**２．民に親しむにあり**

“ 明徳を明らかにした人 ” は、それを自分自身だけのものにするのではなく、「周りの人たち(社会)に、どんどん影響を及ぼして行きなさい」、ということ。

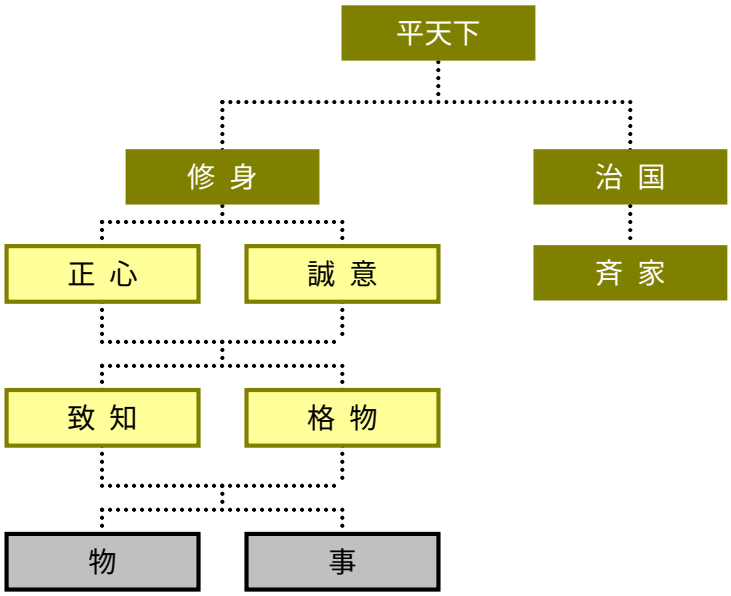
**３．至善(しぜん)に止(とど)まるにあり**

“ 至 ” とは、他とは比べようもないくらい「(高峰の)トップ」であること。

“ 至善に止まる“ とは、「高峰の最高位の善い状態を維持しなさい。そして、さらに高めていきなさい」、ということ。

⇒『本来、人として持つ善いところ』を発揮して、それを『周りに影響を及ぼす』ということを繰り返し、その最高の状態を目指して、『それを維持しなさい』ということ。

## 大学の３綱領に対する細目(８条目)＋２




≪事前必読書≫

◆致知出版社(253 ページ)
◆著者：伊與田　覺

**開催要項**

≪時間≫　平日コース：５時間×３回
　　休日コース：７時間×２回
≪定員≫　少人数制　※事前必読資料をお渡しします。